昭和25年2月10日第3種郵便物認可　平成25年1月1日発行（毎月1回1日発行）　第96巻第1号　ISSN 1341-6669

わはは不ット P68~

2013年1月

月刊福祉

1
JANUARY
Monthly
Welfare
2013

特集
社会保障と財源

人と人をつなぐ実践

実践1

香川で楽しく子育て

香川県◉NPO法人 わははネット

情報不足からくる育児不安。それを実感した母親たちが立ち上げた育児サークル「わははネット」。地元に密着した子育て情報の発信を目的に、情報誌の発行、携帯電話を利用した子育て情報配信サービス、地域の親子が気軽に集えるひろばの開設など、さまざまな事業を展開している。当事者である母親の視線を大切にしたその取り組みは、香川県の多くの母親たちから支持されている。

情報不足からくる育児不安を解消したい！

「わははネット」の前身は、子どもとの遊びを中心にした育児サークルだった。しかし活動を行うなかで、自分たちが本当に求めているものに気がついた。それが、地域の子育て情報だった。小児科に行くならどこの小児科がいいのか。子ども服はどこで買うのがオススメか。子ども連れでも気軽に行けるレストランって？　地域に密着した子育て情報はあまりにも少なかった。情報不足は育児不安へもつながっている。

そうしたことから1998年、〝情報不足からくる育児不安の解消〟を謳い、子育て支援のための情報発信を目的とした育児サークル「わはは（輪母）ネット」を立ち上げ、2002年にNPO法人を取得した。

わははネットはさまざまな角度から子育て情報を発信しているが、大きな柱となっているのは、子育て情報誌『おやこDEわはは』『子育て情報携帯配信サービス』『つどいのひろば』の3つである。

●子育て情報誌『おやこDEわはは』：編集に携わったのはサークル仲間のママ友10人。全員編集経験なしの専業主婦だった。作業は自宅や公民館の一室を借りて行い、まさに手探りでの編集作業となった。

時を同じくして国の少子化対策特例交付金が各自治体に振り分けられた。香川県でも子育て情報誌の制作が検討され、わははネットにもコンタクトがあった。県と共同で制作することができれば、資金面の課題はクリアされる。しかし当時の行政が制作する情報誌には厳しい規制があり、特定の病院や店を紹介するわけにはいかない。託児サービスのある歯医者を紹介するにしても、平等に歯医者

商店街の空き店舗を利用した「つどいのひろば」。1日平均20組の親子が訪れる。気軽に、誰でも立ち寄れるのが特徴

の一覧を載せてそこにアイコンをつける程度しかできないという。それでは電話帳と変わらない。わははネットは独自で情報誌を制作する道を選んだ。

『おやこDEわははは』は1999年に創刊されたが、編集作業以外にもいくつもハードルがあった。いちばん苦労したのは販売ルートだ。県内の大手書店と生協へ取り扱いを願い出たが、どちらも簡単にはいかなかった。「うちは商売でやっている。信頼できる商品を間違いなく届ける責任がある」「香川県だけの子育て情報なんて誰が買うんだ」。言われたことはいちいち納得できた。それでも繰り返し頭を下げ、思いを伝え続けた。時間はかかったが、大きなふたつのルートができた。

2号までは年に1回、3000部を刷って650円で販売した。これが母親たちの間で評判となり新聞などにも紹介された。3年目に季刊誌となる。この頃から広告収入が増え、4年目にはフリーペーパーとなった。現在は隔月で発行し、部数も2万5000部となっている。

わははネットは、子育ての情報の〝発信〟をするもので、読者や会員との双方向でのやりとりは行わないというのが基本姿勢だが、情報誌への問い合わせなども多い。「できるだけ対応していますが、なかにはメールなどでは返答しにくい内容もあります」。特に「○○幼稚園の保護者会は大変だと聞いたけれど本当ですか」といった情報や「○○病院で誤診があったって本当?」というネガティブな情報は扱えない。しかし母親たちがこうしたことで困っているということも事実として受け止めなければならない。

しだいに双方向でやりとりができるリアルな場の必要性を感じるようになり、親子が集えるひろばの開設へと乗り出した。

●つどいのひろば:2002年に坂出市坂出駅前元町商店街に「わははひろば坂出」、2003年に高松市大工町商店街に「わははひろば高松」を開設した。どちらも商店街の空き店舗を利用し、0~2歳児の子どもとその保護者を対象にした。

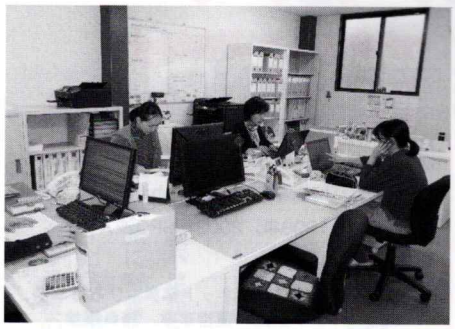
子育て支援センターの機能と似ているが、わははネットが行うひろばの特徴は、商店街という目立つ場所にあり、気軽に立ち寄れる井戸端的な雰囲気をもっているところだ。「自分で調べて子育て支援センターへ行けるお母さんはそこへ行ってもらえればいいんです」と理事長の中橋恵美子さん(44)はいう。しかし、現実には子育てに疲れて情報を探す力が残っていない母親がたくさんいる。そうした親子を支援しようと、商店街という目立つ場所でひろばを開設した。

各ひろば1日約20組の親子が訪れているが、高齢者や商店街の人たちも顔を出すようになり交流が生まれた。開設した当初は考えもしなかったが、それも魅力になっている。新たに高松市の香西にも開設され、現在は3か所とも市の委託事業となっている。

開設時間は10~15時。専属の職員を2人ずつ配置している。職員は、訪れる母親の話を聞いたり相談にのったりすることも多い。内容によっては、市役所、保健師、

NPO法人わははネット

所在地	香川県高松市大工町1-10
電話	087-822-5589
FAX	087-816-5582
ホームページ	http://www.npo-wahaha.net/
開設年	1998年。2002年NPO法人化
スタッフ	16名
事業内容	出版事業、ネット事業、ひろば事業、イベント企画・運営事業、請負事業



事務局の様子。授乳をしながら、おむつを替えながら編集作業をしてきた15年来の仲間たち

発達支援施設、助産師、医者など他機関と連携して対応することもあるという。

こうしたひろば事業とほぼ同時期に始まったのが、携帯電話を使った子育て情報の配信サービスである。

●子育て情報携帯配信サービス：より多くの人たちに情報を届けたいという思いから、携帯電話によるメール配信サービスを開始した。情報は登録した人の地域や子どもの年齢によって自動的にセグメントされる。現在登録者数は4000人を超えている。

子育て情報誌『おやこDEわはは』。街のあちこちで手に取ることができる。発行部数は25,000部!

母親たちの声から生まれた「子育てタクシー」

3つの大きな柱を軸に、イベントやセミナーなども活発に行っている。特に注目したいのは2004年から始まった「子育てタクシー」の展開だ。

子育てタクシーとは、子どもと母親にやさしいタクシーのことで、ドライバーは子どもの扱いや親子への接し方など、ある一定の講習を受けてはじめて「子育てタクシー」を名のることができる。

この取り組みのきっかけになったのは、つどいのひろばに来ている母親たちの会話だった。「出産のために病院に行く時タクシーを呼んだけど、運転手さんが冷たかった」「子どもが病気の時に近距離だけどタクシーに乗ったら不機嫌になって、おつりを投げ返された」。そうした話を聞きながら、一方でタクシーのインフラに注目した。

タクシー会社は365日ほぼ24時間稼働。電話をすればすぐに来てくれる。お金はかかるがドアからドアまでのサービスを行う。これが子育てとつながったら……と考えて企画したのが子育てタクシーだった。「働く親への支援として子どもだけでも送迎してほしい。親子が乗った時に親切にしてほしい。病気の子どもを抱えている母親へはこう対応してほしい」。中橋さんたちは企画書をタクシー会社へ持って行った。しかし、やってみようと手を上げるところはなかなか現れなかった。そんな時、情報誌の読者のなかにタクシー会社の社長だという若い母親がいたことを思い出した。中橋さんはすぐに彼女に連絡を取った。

「ぜひやらせてほしい」。その言葉で動き出した。まず、ドライバーを10人ほど集めて研修を行った。当初は誰もが「何でこんな面倒なことを」という表情で研修を受けていた。中橋さん自身、お母さんたちのヒアリングから企画を考えたものの、実際にお金を出してこのサービスを利用するだろうかと、半信半疑だった。そこで2か月間の試験運行を行ったが、これを機にドライバーたちの意識が大きく変わった。「一定の利用があっただけでなく、利用した親子の反応に動かされたのです」。ある母親は下車する時に何度も礼を言い、またある母親は感謝を込めてタクシー会社へ礼状を送った。そんな母親たちの姿に、ドライバーたちは心を動かされた。

子育てタクシーのロゴステッカーを貼ったタクシーは話題になり、マスコミに取り上げられた。

子育てタクシーのドライバーは130

対策には何が必要かわからない

2011、2012年の2年間、中橋さんは県のワーク・ライフ・

り、マスコミに取り上げられた。数々のタクシー会社から問い合わせがあり、うちでもやってみたいと手があがった。その後、子育てタクシー協会が立ち上げられ、一般社団法人化された。今、県内7社のタクシー会社が対応し、子育てタクシーのドライバーは130人以上になっている。

企業と子育てをつなげていくことが今後の課題

わははネットの活動は15年目を迎える。子育てが難しい、少子化対策には何が必要かわからない……といわれる現在、母親たちと膝をつき合わせ、今困っていること、今悩んでいることに向き合っている。当事者である母親にいちばん近いところで活動しているのがわははネットなのかもしれない。

2011、2012年の2年間、中橋さんは県のワーク・ライフ・バランス推進事業に参加し、さまざまな企業をまわってワーク・ライフ・バランスの推進を促している。「子育てを見直そう、働き方を見直そうと子育て世代に言っても、会社がそれを認めなければ実現することはできません」。こうした企業へのアプローチもこれからの子育て支援には重要になるのではないかと言う。

社会で子育てをするという時、企業は大きなファクターになる。「企業と子育ては関係ないといっている限り、子育て環境はよくならない。女性にとって働きやすい職場づくりも企業が鍵をにぎっていますから、そういうところに切り込んでいきたい」と、力強く語る中橋さんの生き生きとした瞳が印象的だった。

情報はつなぐ力

NPO法人わははネット理事長　中橋恵美子さん

日本はまだまだ子どもか仕事かの二者択一の社会。そのなかで自分は、子どもも仕事も自分の生きがいも全部ほどよく、100点ではないけれど80点でやっている。それができるのは、いろいろな人の力を借りているからだと中橋恵美子さんは言う。

人の力を借りながら子育てをしていくという社会ができれば、親は子どもにやさしくなれる。そのためには社会が関わる仕組みが必要だ。

取材の最後に、情報の力とは何かと尋ねた。寸秒の後、中橋さんは「情報自体に力はない」と答えてこう続けた。「情報はハブ機能に対する力というか、つなぐ力」。情報をたくさんもっているから、つなぐことができる。相談に来た人の話を聞いて、それならあそこにいけばいい。これで困っているのなら、ここがいいと的確につないでいける。単に「市役所の○○相談室よ」ではなく、「○○相談室のAさんだったら親身に対応してくれるから、電話入れておいてあげるね」と、そこまで具体的に、はっきりと見えるかたちでつないでいくことが大事だという。それができるのは、情報量であり、情報の深さだ。

わははネットは、"子育て"というキーワードにおいて膨大な情報をもっている。といってもすべてを集約することは不可能だ。だからこそ、人とつながる。各分野でその分野の情報を集約している人たちとうまくつながっていく。ハブとハブがつながっていくことが力になる。「つなぐ力は、情報をもっている人の力なんだろうなと思います」

三児の母親でもある中橋さん。失敗を恐れずに取り組む姿勢と柔軟な発想でわははネットを引っ張っている